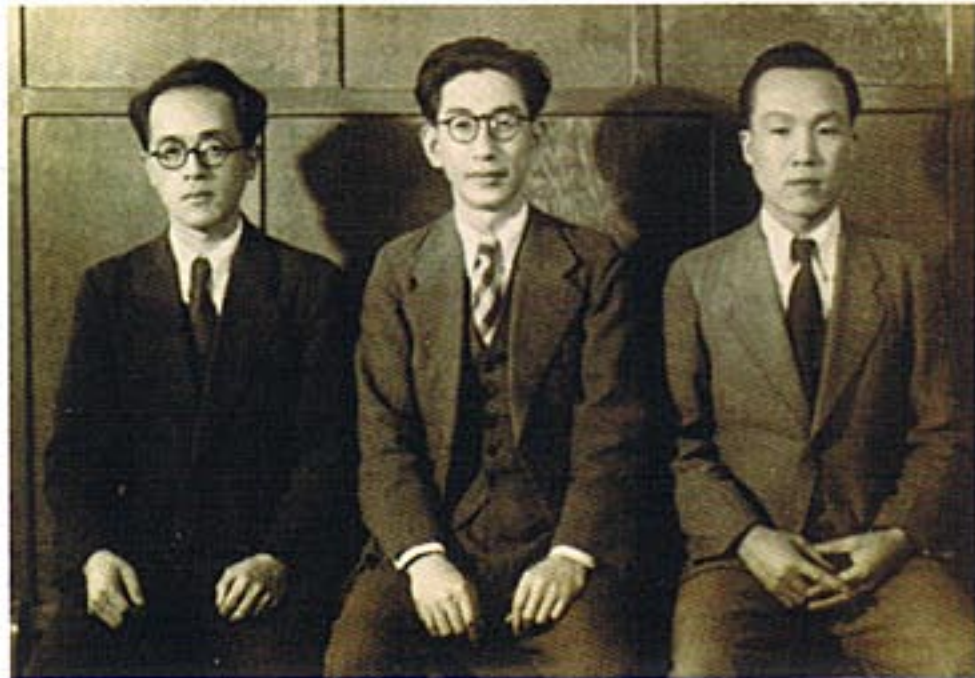


胃カメラの開発

終戦後、結核による死亡が減少すると、日本人には胃がんの頻度が高いことが目だってきた。1950年代には、胃がんは見つかったときにはすでに進行しており、不治の病と恐れられていた。



左から、杉浦、宇治、深海

胃がんの治療に挑む医師たちは、食道の下にある胃をなんとか直接観察できない

ものかと考えていた。1950年に、宇治達郎、杉浦睦夫、深海正治が、柔らかいチューブの先にカメラをつけた「ガストロカメラGT-1」を開発した。その後、光ファイバーを利用したファイバースコープが開発され、次いで、がんが疑われる病変からその一部を採取できる現代の内視鏡が完成した。これらの結果、胃がんの早期診断が可能となった。現在では、胃がんは初期段階での発見が可能となり、不治の病でなくなった。

